

株式会社日立製作所

社会イノベーション事業を支えるIT構造改革 シンプルを軸にIT運用管理やコミュニケーションを見直し

日立製作所（以下、日立）の IT デジタル統括本部は、グループ全体の IT 構造改革に取り組んでいます。シンプルさを改革の軸に据え、その実現のために Cisco Secure Access、Cisco Catalyst SD-WAN、Splunk Cloud Platform、Cisco Devices の 4 つのシスコソリューションを有効活用しています。これらのソリューションによって、システムアクセスやネットワークの統合管理、IT の可視化、そして、コラボレーションの質の向上を実現し、同社が注力する社会イノベーション事業に貢献しています。



株式会社 日立製作所

本店の所在地

東京都千代田区丸の内一丁目 6 番 6 号

設立年月日

大正 9 年 (1920 年) 2 月 1 日
[創業 明治 43 年 (1910 年)]

連結従業員数

287,901 名 (2026 年 3 月末現在)

IT と OT (Operational Technology) の両面で培った経験と深いドメインナレッジを強みに持つ日立。人々の幸せを支える社会イノベーション事業を多様な業種でグローバルに推進しています。

課題

- ・ グループ会社やグローバルの地域ごとに異なるシステムやサービスが混在し、セキュリティポリシーや運用管理の統一が困難
- ・ クラウド化が難しいレガシーシステムが残存し、IT 環境の複雑化に拍車
- ・ IT 環境の可視化が不十分で、インシデントへの対応が事後対応型にとどまっていた

ソリューション

- ・ Cisco Secure Access により、場所を問わずクラウドとオンプレミス環境へ統合的かつ安全にアクセス可能
- ・ 約 1,100 拠点を結ぶ日立グループのイントラネット「GWAN」を一元管理するために Cisco Catalyst SD-WAN を活用する計画。多様な回線を統合し、East-West トラフィックも柔軟に制御できると期待している
- ・ Splunk Cloud Platform を IT 運用管理の「頭脳」として位置付け。多様なデータを単一画面に集約し、事後対応型から事前予防型の運用へ転換
- ・ Cisco Devices をグループの会議室用システムとして標準採用。Microsoft Teams 連携にも対応し、コラボレーション環境を整備

結果

- ・ GWAN 全体の一元管理を実現し、拠点ごとに個別対応していたネットワーク構築の工数を大幅に削減できると期待
- ・ IT オブザーバビリティの強化により、インシデントを未然に防ぐ事前予防型対応への転換を推進
- ・ 率直な議論を重ね、IT 構造改革を支える強固な信頼関係をシスコと構築

今後

- ・ 安全な AI 活用環境の実現に向けシスコと共同で検討を継続

シスコとの信頼関係が
IT構造改革を支える
強固な土台となっています

小野 俊彦 氏

株式会社日立製作所
IT デジタル統括本部
エンプロイーエクスペリエンス本部
本部長

課題

グループ全体を対象にした大規模な IT 構造改革

現在、日立の IT デジタル統括本部は、日立グループの事業拡大に貢献するために、デジタル経営基盤構築と IT 構造改革に取り組み、俊敏性・効率性・堅牢性を兼ね備えた IT 環境を実現しようとしています。

「IT デジタル統括本部のミッションは、世界中で展開する日立グループの事業を IT で支えること。IT・デジタル・先端技術の活用、共通プラットフォームの整備、働き方改革、人財育成などを通して、日立の成長戦略に貢献していきます。非常に困難な使命ですが、常に既存の仕組みや業務を見直し、改善を重ねながら、事業の持続可能性を確保するために最適なアプローチを選択することを心がけています」と同社の小野 俊彦氏は話します。

IT 構造改革においては、日立グループの事業ポートフォリオが変化し、事業アセットのグローバル化などが進む中、その変化に対応するために多方面から改革を進めています。改革を通じて同社が解決を目指している課題の 1 つが IT 環境の複雑化です。IT 環境の複雑性は、日々の運用管理だけでなく、システムトラブル対応やセキュリティ強化にも大きな影響を与えるからです。

例えば、グローバルに事業を展開する日立グループの業務の中には、グループ会社やグローバルの地域ごとに異なるソリューションを採用し、独自の方法で行っているものがあります。そのような固有業務の存在が IT 環境の複雑さを高めていました。中でも深刻だったのがレガシーシステムによって支えている業務です。「日立グループはシステムのクラウド化を推進していますが、既存アプリケーションの修正に時間やコストがかかるといった理由から、クラウドへの移行が難しいシステムの一部はレガシーシステムのまま運用しています。IT デジタル統括本部の役割はビジネスを支えることですから、そうした状況にも対応しなければなりません」と小野氏は強調します。

ソリューション

シンプルを軸に 4 つのシスコソリューションを活用

同社が、IT 変革の軸に据えたのが「シンプル」という考え方です。「IT 環境の複雑性を解消し、システムトラブルへの迅速な対応や、セキュリティ強化を実現するためだけでなく、IT デジタル統括本部が、本来、注力すべき AI 活用などに集中するためにもシンプルさを追求すべきと考えました」と小野氏は言います。

シンプルさを実現するために、同社が有効活用しているのがシスコの 4 つのソリューションです。

• Cisco Secure Access

同社は、悪質化するサイバー攻撃に対応するため、早くから多様なセキュリティソリューションを導入してきました。しかし、各地域のニーズに合わせて個別最適なサービスを導入したため、セキュリティポリシーや運用がバラバラになっていました。また、システムのクラウド化やハイブリッドな働き方の浸透などを受け、ユーザーがどこからでもセキュアにクラウドサービスや、オンプレミス環境に最適にアクセスできる接続環境も求められていました。

そこで同社が導入を予定しているのが Cisco Secure Access です。Cisco Secure Access は SASE (Secure Access Service Edge) として統合的かつ安全なアクセス環境を提供することが可能。ユーザーは場所を問わず安全にクラウドサービスやオンプレミス環境のアプリケーションをシームレスに利用ができるようになります。

IT デジタル統括本部にとっても、クラウドとオンプレミス環境へのアクセスを統合管理できるというメリットがあります。「以前は通信にトラブルがあると、その原因を見つけるために複数のコンソールをチェックする必要がありましたが、Cisco Secure Access を導入すれば、1 つのポータル画面にログインするだけで、通信状況を横断的かつ簡単に把握できると期待しています」と小野氏は言います。

• Cisco Catalyst SD-WAN

ネットワークについては、SD-WAN によって日立グループ

のイントラネット「GWAN」の最適化を図るために、Cisco Catalyst SD-WAN を活用する計画です。

GWAN は、日本を含め世界中の約 1,100 拠点を結ぶ大規模ネットワークです。以前の GWAN は、部門やグループ会社、地域ごとに導入された回線が混在しており、統合管理や柔軟な制御が困難でした。

Cisco Catalyst SD-WAN は、それぞれの拠点に SD-WAN ルーターを設置すれば、専用線や ISDN、インターネット回線など、多様な物理回線上に仮想的なネットワークを構築でき、1つのコントローラーから回線の違いを意識することなく GWAN 全体を一元的に管理・制御できるようになります。前述したように日立グループの中には、クラウド移行が難しいレガシーシステムが残っているため、East-Westトラフィック（拠点間・部門間通信）の適切な管理が重要なネットワーク要件となりますが、Cisco Catalyst SD-WAN なら、そのトラフィックをより厳密に制御することができます。「Cisco Secure Access と共にシ

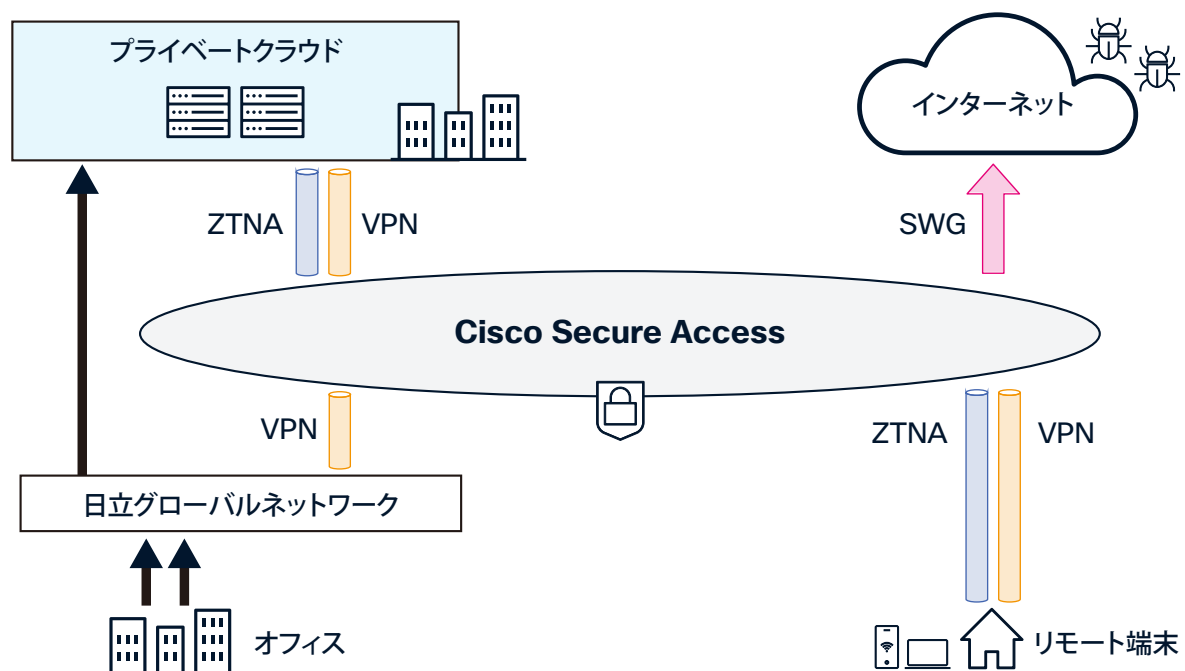
ステムアクセスの安全性を高めることができます」と小野氏は話します。

• Splunk Cloud Platform

システムの運用管理においては、Splunk Cloud Platform を「頭脳」として位置付けています。具体的には、様々な IT ツールと連携させて、多様なデータを Splunk Cloud Platform に集約。Splunk Cloud Platform の単一画面で可視化して、運用管理のシンプル化に役立てています。

「Splunk Cloud Platform の強みは柔軟性です。カスタマイズが容易で、求めるダッシュボードを自在に構築できます。そのダッシュボードを通じてサービスやシステムの稼働や利用状況を明確に把握し、リスクを発見した場合は、すぐに関係者と共有して、トラブルを未然に防ぐ。トラブル対応を『事後対応型』から『事前予防型』に転換しようとしています。Splunk Cloud Platform は、単なる可視化ツールではなく、IT レジリエンスを高めるための基盤です」と小野氏は説明します。

Cisco Secure Access によるシステムアクセスの統合



• Cisco Devices

IT デジタル統括本部にとって、オフィスとリモートを併用するハイブリッドな働き方の中で従業員が十分な力を発揮できるように支援することも重要なテーマでした。そこで、増加しているリモート会議の質を高めるために、グループの会議室用システムに Cisco Board Pro、Cisco Room Bar Pro や Cisco Desk Pro などの Cisco Device を標準採用しています。「日々、社内外とのコミュニケーションに活用しています。音声と映像の品質の高さはもちろん、会議室の全景や参加者ごとの分割画面を使い分ける自動フレーミングや話者をアップするオートフォーカス機能などがスムーズなコミュニケーションを支えています」と小野氏は言います。

Webex 以外のビデオ会議サービスとの連携も評価しました。例えば、Cisco Devices は Microsoft Teams と親和性の高い Microsoft Teams Rooms にも対応し、ポートフォリオには Microsoft 社から正式に認定されたビデオ会議端末とパネルが用意されています。これにより、画面をワンタッチして会議室の Cisco Devices を参加させれば、すぐにリモート会議を開始できるシンプルな操作を実現。Zoom や Google Meet などのサービスであっても同様にワンタッチで会議を開催でき、会議の開催に伴う煩雑な作業を削減します。

結果～今後

信頼関係を土台に新たな社会イノベーションを実現

4 つのシスコソリューションは、同社の IT 構造改革を大きく後押しします。

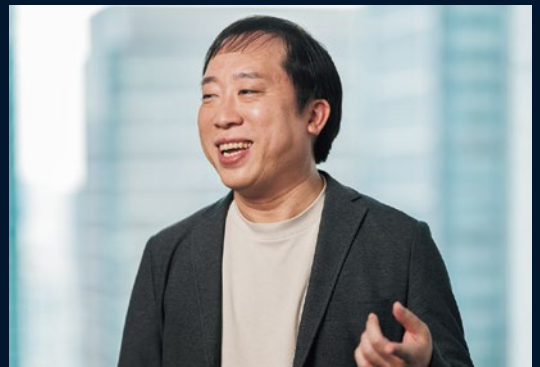
Cisco Secure Access は、システムアクセスの安全性と利便性を両立する上、複数のコンソールに分散していた通信管理を統合し、トラブルの原因特定と対応のスピードをアップします。Cisco SD-WAN は、約 1,100 拠点を結ぶ GWAN 全体の一元管理を実現し、拠点ごとに個別対応していたネットワーク構築の工数も大幅に削減します。Splunk Cloud Platform は、IT オブザーバビリティ（可観測性）を確実に強化し、インシデントを未然に防ぐ事前予防型対応への転換を実現。そして、Cisco Devices は、

ハイブリッドワーク環境における会議の質を高め、日々のコミュニケーションを支えています。

これらのソリューションだけでなく、同社はシスコの体制や対応力を高く評価しています。「ソリューションを選ぶ際には、当然、機能や価格などの比較を行いました。そのベンダーが信頼できるかどうかにも重視しました。例えば、導入したソリューションにも影響があるトラブルが発生した際、早期に解決できるかどうかはベンダーとの関係性も重要になります。その点、シスコは世界中のチームが一丸となり、率直に意見をぶつけ合いながら共に問題解決にのぞんでくれます。その積み重ねによって構築した強固な信頼関係は、私たちの IT 構造変革の重要な土台となっています」と小野氏は強調します。

現在、日立は安全な AI 活用環境の実現を目指していますが、その取り組みにおいてもシスコと議論を重ねています。「日立グループは、世界中の AI を活用していく方針を掲げており、いかに AI を安全な環境で使いこなすかが重要テーマとなっています。Cisco Secure Access を軸に、安全な AI 活用環境の実現に向けた議論をシスコと重ねています」と小野氏は言います。

シスコとの強固な信頼関係を土台に、今後の同社は IT 構造改革をさらに加速させながら、世界中で新たな社会イノベーションを実現していく構えです。



株式会社日立製作所
IT デジタル統括本部
エンプロイーエクスペリエンス本部
本部長
小野 俊彦 氏

HITACHI

「社会インフラをデジタル技術で進化させ、環境・幸福・経済成長が調和する未来を創造する」をグループ・ビジョンに掲げている。資源・エネルギー・環境問題など、現代の地球規模の課題に真正面から取り組み、持続可能な社会の実現に貢献する。

URL <https://www.hitachi.com/ja-jp/>

製品 & サービス

- Cisco Secure Access
- Cisco Catalyst SD-WAN
- Splunk Cloud Platform
- Cisco Devices